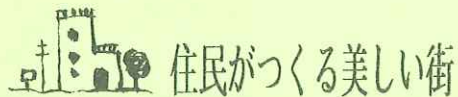


お知らせコーナー

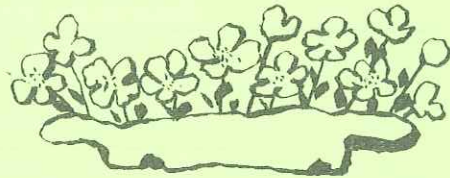


蔵敷交差点の花壇に、色とりどりの花が植えられ、道行く人々をなごませてくれています。

これは、蔵敷商店会が50万円を投じて実現したもの。現在、平瀬川を中心に、「うるおいのある街づくり」計画が、住民と役所の協力ですすめられています。その一環として、長安寺から菅生神社までを「フラワー通り」にしようというもので、蔵敷交差点の花壇はその計画の第一歩。花は、これから季節ごとに植えかえられるとのこと。ショッピングをする人、郵便局へ行く人、幼稚園児を送り迎える人、分館へ急ぐ人、車で通過する人・・・交差点を通る楽しみができそうです。



足で書いた子育て冊子ができました



「子どもに友だちがほしい」「子育て仲間がいれば・・・」という子育て真っ最中の親につよ～い味方ができました。

「菅生子育てマップ」

「親子で楽しめる情報満載の子育てマップ」があれば、子育てがもっとウキウキするのではーと、菅生分館の呼びかけに集まった幼児をもつお母さんたちが足で調べた菅生地域の子育て情報誌。子どもが育っていく環境はどうなんだろうという好奇心、親子で心を通わせられる仲間がほしいという気持ちがこの冊子を作る活力に表れています。公園や雨の日でも遊べる施設から医療機関やサークル紹介、子連れママの「お願い」も掲載。地域で遊ぶ、暮らす、友だちがほしいというお父さんお母さんに好評。菅生分館で配付しています。(977-4781)

編集後記：「いじめ」の問題を継続的に考えていくために、「いじめを考えるシリーズ」を続けようと思います。皆様のご意見や情報をぜひお寄せください。「トライアングル」は、菅生分館、こども文化センターでも入手できます。

「地域の中の子どもたち」

「地域の子どもの活動はどうなっているのだろう」。宮前区区民懇話会のメンバーが、区内の子ども会や市民グループ、公共機関にアンケートを行った結果と、「子どもの活動をどう支援するか」のシンポジウムや、こども文化センターについての座談会の記録を編集。子どもの自立を助ける活動を考えようというのがテーマ。区内の子どもを対象とした自主グループもほぼ網羅しているため、新住民が地域の活動を知る手がかりになりそう。区内の学校、図書館、市民館、分館、こども文化センターで読むことができます。

菅生中学校区地域教育会議ニューズレター(4)

1995年5月25日

発行：菅生中学校区
地域教育会議
編集：同広報委員会
事務局：菅生中学校
☎977-8787

トライアングル菅生

地域教育会議・菅生地区のとりくみ

よちよち歩いて一年

菅生中学校区地域教育会議が昨年6月に始まって一年。振り返って、そして次へステップ！ 薄井議長のメッセージを紹介します。



試行錯誤しつつ

地域の 手足・口・耳に

議長 薄井健雄

地域教育会議が菅生中学校区に発足して、早一年が経過しようとしています。その間、多くの住民の皆様、また各委員の方々には公私に渡るご指導・ご協力いただき真にありがとうございます。

各委員会も、試行錯誤を繰り返しながらも順調に活動を続けています。もともと、この地域教育会議は市内の小中学校区集会(市民会議)での話し合いをもとに川崎市教育懇談会から提言され、市内各中学校区に設立されることになりました。現在、宮前区では、野川中学校区、宮前平中学校区、菅生中学校区内で試行・実施されています。

地域教育会議が学校、父母だけに限らずこれから益々、地域内の生涯学習等

の重要な位置を占めていくとき、個々に活動している各機関・団体のネットワーク化を積極的に図っていかねばと思います。

今まで行政が縦割りの中でばらばらな行政、市民サービス等を行っていましたが、この教育会議が完全に機能を発揮できれば、川崎市そのものの財政、人員等の軽減もできるのではないのでしょうか。また、市民からの要望や提言も多様化した各行政機関を回らず、直接的に一本化できると思います。

今後共、多くの地域の皆様のご参加をいただくと共に、この会議が皆様の手足耳、口になるよう誠意努力をしたいと思えます。

菅生中学校区地域教育会議

平成7年度

第1回総会

6月15日(木) 18:00

於：菅生中学校金工室

地域と学校に〈安全と安心を〉

—みんなかくさずに話し合おう

一橋大学教授 藤岡 貞彦

編集の方が整理して下さったみごとな「いじめを考える」講演要旨におどろきました。もし私が整理してもこれほど上手にはできないでしょう。冗長な当日の私の話しより、この短い「要旨」の方が、皆さまの頭にスッキリと入るように思われます。ありがとうございました。

私のいいかかったことは、1994年11月27日と1995年1月17日はともに忘れられない日である、という一事です。大河内君の自殺は、学校が青少年の安全と安心を保障していないことの証明でした。阪神大震災は自治体が住民の安全と安心を保障していないことの証明でした。二つのできごとは、共通の教訓をしめしています。それは、およそ人間にとって、「安全」と「安心」以上に大切なものはなく、今のままでは、学校にも自治体にも安心することができないということです。

その後、今年3月20日のあのサリン事件と、最近、私の身边でおこったJR横浜駅での異臭事件は、都市が「安全」と「安心」の欠けた場所であることを悲しくも証明しました。

青少年も大人も、「安全」と「安心」の保障をもとめて手をとりあって努力しなければならないことを三つの事件はおしえています。

さまざまな地域づくりの努力をみもらせてきた川崎の先進地・菅生で、青少年と父母と教師のトライアングルによる地

2月16日に行われた「いじめを考える講演」要旨と菅生中の山田先生からの質問を、『トライアングル菅生』3号でお伝えしました。今回は藤岡先生からの回答をご紹介します。

域づくりと学校の民主化がすすみ、皆に〈安全と安心〉をあたえていくことを心から願います。菅生地域教育会議は、必ずや、この課題を達成して、私たち後輩にみせて下さるにちがいないと固く信じています。

トライアングル(3)の「質問」へのおこたえ

菅生中の山田茂樹先生から、私の講演に二点の質問がありました。こういう形の質問と回答が会のニュースにのるといふ例は聞いたことがありません。山田先生と編集部のご配慮に感謝いたします。

第一のご質問は、なぜ責任の所在を、「国家」「人間」にまで拡げないのか、という点です。

私は、大河内問題の責任を無限に拡大することに反対です。問題と責任の所在はするどく焦点化されなければなりません。国家の本質や人間存在の本質にまで拡大することは百害あって一益なし、と考えます。いうまでもなく、近年の教育政策が競争をいたずらにあおり、文教予算を合理化することによって、偏差値価値観をひろく国民にしみとおらせた責任はまぬかれず、大河内問題の深い背景が教育政策にあることは明白です。また、大人が競争と効率優先の現代社会をつくりだし、子ども・青年をその淵においやったことも決して免責されたいでしょう。

しかし、今必要なのは、問題の所在の

ありかを一人一人が自分の立場から自分に問いかけ、焦点をしばって今すぐできることを考えることだと思います。

そこで、私は、当夜、二つの焦点をあげ、皆さんにも一人一人が考えた焦点づけを求めたのです。一つは「いじめをみてみないふりをする優等生たちの傍観者」根性。二つは〈学校の閉鎖性〉をつくりだし情報公開を阻んでいる教育行政の学校への指導。この二点は誰にも納得されるポイントでしょう。同様に、他の人たちは他のポイントをあげるでしょう。それで良いのです。一人一人が「一燈照隅」の立場で、今すぐできることにむかっていくことが必要だと信じます。責任を拡大させてはなりません。

第二のご質問は、論旨が、「事件周辺の遠因要素個々の内部に拡がっていない」というご指摘です。当然のことながら、大河内問題については不明の点が多く、その科学的解明はすべてこれからのことであり、「遠因要素個々の内部」はまだブラック・ボックスに入っています。たとえば、26歳のクラス担任の女教師と「社長」といわれたリーダーとの関係は「近因要素の内部」の焦点かと思われませんが、当事者の証言に未だ接することはできません。この二人が大河内君とならぶ悲劇の主人公であることは明白です。すぐれた現地調査やルポルタージュ（たとえば、『現代』2・3・4・5月号所収）などを手がかりに今後考えていく他はないでしょう。『鹿川君問題「8年後の証言」』（風雅書房）も一つの手助けとなりましょう。

おわりに「教員が実践に生かせるような回答を」と注文されています。

私は、数々の事件がなぜ中学におこるのかを、ぜひ中学の先生がたに解明していただきたいと思います。中学校は日本の教育問題の焦点です。そのうえで、何

よりも子ども・青年を「安心」させることに、教育実践の中核をおいていただきたいとねがいます。おそらく、生徒の自治活動が「安心」しておこなわれることが、問題解決のカナメでしょう。自治活動とは生徒じしんが問題解決能力をもっていることをいうのですから。たえざる「試験」・「競争」・「偏差値による自己の位置づけ」におびえている子ども・青年にどうか「安心」を与えて下さい。子ども・青年に「安心」を与える先生だけが救いの主なのです。ぜひ、菅生の父母住民の子どもと地域を守ってきた運動の歴史にも学んでいただきたいと切望します。そこに子どもと学校を守る真の力があるのです。

専門のちがいについての言及もありました。いったい、いじめについての専門性などあるのでしょうか。

教育に専門家はあっても、「いじめ」についての専門家は（子育ての専門家がいないように）いるはずがありません。教育の荒廃はすべての人がとりくむべきことなのです。あらゆる立場の人たちが、一人一人自分の角度から自分なりにできることを考えなしとげること。その総合のうえにしか対策はないと存じます。

「いじめ」が複合汚染である以上、一人一人が一隅を照らし、その努力を複合化する他はないのです。

稗原小では、「教育を語るつどい」が開かれたと前号の記事にありました。これこそ希望の光です。みんなかくさずに話しあおう、をモットーにした父母と教師の隔意なき話しあい。その前提としての学校の大胆な「情報公開」。それらに支えられた子ども・青年に「安心」をもたらす教育実践。このトライアングルが複合汚染対策の中軸と信じます。

(1995年4月23日)

